月岡雪鼎考　― 画業と受容をめぐる一考察 ―

関西大学　西垣 香

本発表では十八世紀後半の大坂を中心に活動した月岡雪鼎の画業と受容について論じる。近年、月岡雪鼎研究は山本ゆかり氏により生年の見直しと行年書の加齢問題が提起され、その生涯が明らかになりつつある。しかし、数多く遺存する作品の検討や画業の位置付けはなされておらず、また雪鼎が没した後雪鼎の作風がどのように門人へ継承されたのかという問題も残されている。これまで雪鼎の美人図は様式化された面貌など、表現の変化に乏しく編年作業の困難さが言及されてきたが、明和初期の長身でほっそりとした姿形から、明和後期の豊満な肢体と卵型の輪郭をしめす顔貌へと変更されている点が指摘できる。こうした展開を経て安永年間には豊麗で重厚感のある雪鼎美人図が量産された。

そこで本発表では雪鼎の絵画がいかなる制作理念のもとに作られ、購買者層へ浸透していったのかという視点を含めて雪鼎と月岡派の特質を明らかにしたい。

また、雪鼎の画業を明らかにするためには雪鼎の長子とされる雪斎と門人の作品も扱う必要がある。考察の結果、雪斎には雪鼎作品を踏襲した図様が多数確認され、雪鼎が合理的に作画を行うため注文画題に応じた「雪鼎様」の図様提供を行っていたことが判明した。雪鼎の法眼期には古典的な格調をたたえた王朝人物図が多く描かれるが、雪斎以下門人の遺例からも同趣向の作品が確認でき、この種の絵画が人気画題であったことを示している。すなわち、雪鼎が創案した「雪鼎様」の図様を自身が何度も用いると共に、門人にも学習させ普及をはかっていたことが読み取れる。

以上を踏まえた上で、最後に没後の評価を辿りながら雪鼎と月岡派の指向したところは何であったかを考えたい。文化四（1807）年刊の洒落本「当世廓中掃除」では“移り変わるもの”を挙げた後に「松好井特ハ雪亭流光を蔑にす」とあり、世上の人気が月岡雪鼎・流光斎如圭から松好斎半兵衛・祇園井特へ移ったように評される。しかし文化六（1809）年「浪華画人見立角力組合二幅対」では頭取として文人画系の木村石居と並び称され、その影響力は没後も強く及んだ。また寛政六（1794）年「虚実柳巷方言」、天保二（1831）年「画乗要略」はじめ以降の番付類では、雪鼎は浮世絵画派の項目には現れず「和絵」「雑画」「人物」「国画」といった評言で位置付けられ、浮世絵画派に組み込むことの出来ない一派として認識されていたことがわかる。

このように雪鼎は広く支持基盤を設定することで、流行に左右されることなく工房を展開するに至った。その結果、当世美人図に制作を限定せず多様な注文に応じて画風の幅と画題の領域を大きく広げ、新たな風俗画派としての独自の地位を確立したと結論づけられる。